

コラム
4

テル・レヘシュ遺跡出土の土面

「カルト・スタンド」など鉄器時代Ⅰ期の宗教遺物が集中して出土したC地区では、2008年度の調査で土製の人面が出土した。同地区において鉄器時代Ⅱ期の遺物が乏しいことから、残土内から発見されたこの土面もおそらく鉄器時代Ⅰ期のものと考えられる。

土面は目から上の部分と両頬の外側部分がそっくり欠損している。残存部分の最大寸法はそれぞれ、幅8.4cm、高さ7.1cm、奥行き5.0cmで、人が仮面としてかぶるにはあまりにも小さい。赤色スリップで着色され、目の部分は穿たれた穴として表現されている。あごひげは小さな円を押しつけて表現されており、鼻孔は認められない。この表現技法は、キプロス島のエンコミから出土した鉄器時代Ⅰ期の土面、またフェニキアのサレプタから出土した鉄器時代Ⅱ期とされる土面に酷似している。

南レヴァント地方最古の土面は、後期青銅器時代のハツォルから出土している。その後土面製作の伝統は同地方で受け継がれ、やがて鉄器時代後半になると地中海全域、とりわけフェニキア本土とその植民地において盛んに製作された。

J・B・カーターは地中海地域から出土する土面を型式上大きく2つに分類している。テル・レヘシュ出土の土面はひげがあり、実際の人間の顔よりもずっと小さいことから、カーターの分類する「英雄面」に分類される。このタイプの最古の例はハツォルのものである。

「英雄面」の機能については、何らかの神を表すものである可能性が指摘されているほか、護符としての役割などがあったと推測されているが、決定的な根拠はない。テル・レヘシュ出土の土面の場合、同じ地区から宗教遺物が集中して出土していることから、ここで行われていた何らかの祭儀に使われていたと推測される。しかし、大きさが小さいことから、実際にかぶって使用することは無理だっただろう（長谷川）。



C地区出土の土面（鉄器時代Ⅰ期）